

とあるべきが「集いの人達は」となっていたのです。

*校正ミスを叱られて家を飛び出す

サトウ先生は烈火のごとく怒りました。「詩は一字たりともおろそかにしてはならないもので、一字のミスも許されるものではない」というのです。

校正ミスをした私が悪いのはもちろん、私は平謝りに謝りました。しかし許して下さらないのです。ミスの見つかったのが昼ごろでしたから、それからずっと夕方になっても怒り続けていらしたのです。

私はもうどうしていいかわからなくなり、先夫妻に気づかれぬ隙に家を出ました。コートを着てショルダーバッグを持っただけの軽装でした。

文京区弥生町のサトウ家を出て、広い通りを下ると根津二丁目のバス停があります。当時、上野公園から江戸川区の今井の橋まで都営のトロリーバスが走っていました。私は折りしもやつてきたバスに乗りました。

サトウ先生に叱られたことが悲しくて、どう詫びていいかわからないことが頭を占めていて、ほかのことは何も考えられませんでした。

*バスの終わりが命の終わるところ

バスがどこをどのように走っているかわからないまま、終点まで一時間と少しかかったように思います。その間、もう生きているのが嫌になっていました。終点までは行ったことがありませんでした。

それがどんなところか考えるゆとりはありません。バスの終わりが、私の命の終わるところと思いつめていました。

終点の今井の停留所で、わずかばかりの乗客がバスを降りました。そのあとに従ってバスを

出ると、外は真っ暗で、川風が吹き荒み、耐えられない寒さです。歩いていく先に、温かそうな湯気が立ち上がっていました。ふかふか饅頭の幟が揺れています。

とたんに空腹を覚え、饅頭を買ってぱくつきました。

人は空腹が満たされると、思考が働くようになるのでしょうか。私は四国に母が一人暮らししていることを思い出し、私がいなくなったら母がどんなに悲しむかに思い至りました。

サトウ先生が許して下さらないからには、荷物をまとめて母のところに帰ろう。そう思い決めて、再び上野公園行きのバスに乗り、サトウ家に帰ったのです。

すると、サトウ家の前の細い道にハチロー夫人の姿がありました。いなくなつた私のことを案じて、ずっと探していてくださったのです。

家に入ると、サトウ先生がほつとした様子で、暖かく迎えてくださいました。

一件落着、あつけない幕切れでした。私は詩作を諦めて実家に帰ることもなく、サトウ先生のもとで勉強をつづけたのです。

このころ自殺する人が多く、まわりの人のことを考えないのかしらという声をよく聞きます。しかし、本当につらい事に直面したら、そのこと以外、何も考えられなくなる気持ちも、私にはよくわかります。

*「木曜手帖」で後進を指導し育てた

今、校正ミスをした「木曜手帖」三十二号を開くと、「集いの人達の「達」に小さな切り張りかしてあって、後日「人々」と訂正した跡が見て取れます。後悔をかみしめながら一冊ずつ貼っていた日の名残です。

サトウ先生は「木曜手帖」を後進を育てるためといっておいででしたが、ご自分の作品発表の場にしてもらいました。依頼された仕事

で物を書くだけでなく、本当に自分の書きたい詩を発表する場として「木曜手帖」に新しい詩をのせてもらって、その一つである「雨のオリエンタル」というシリーズの第一作を発表したところでの誤植とあって、それがどんなに残念だったか、今にして思い遣ることが出来ます。

その後も、「木曜手帖」ほか様々な詩集作りに携わってききましたが、このときの辛い思いはずっと念頭を離れることはありません。校了の度に何度手放しがたい思いをしたことでしょうか。

サトウハチロー先生が亡くなって、今年で四十年になりますが、今も誤植の二字を額に貼って生きているのです。



童謡文化賞受賞記念号【600号記念号】



創刊 35周年童謡集【木曜会出版部】

「お手玉の20年」「セソング」に 全国大会の紹介

宮中雲子会長のエッセーを毎月掲載している「和歌山の女性誌」季刊「セソング」2013年春号に、「お手玉二十年」〜宮中雲子先生のお手玉遊びの会」のタイトルで、全国お手玉遊び大会を紹介しています。

「競技や講演・全国の仲間と交流」との見出しで、次のように書かれています。

「日本のお手玉の会」20周年を記念した第17回全国お手玉遊び愛媛・新居浜大会が、9月29日、30日の両日、新居浜市であった。講演や競技に全国の愛好者ら述べ1300人が参加、伝承遊びの良さを見直し、仲間との交流を深めた。」

また、団体戦一般の部の優勝スマイル(和歌山県)、準優勝J A京都にのくにお手玉A(京都府)、3位尼崎お手玉の会(兵庫県)も紹介されています。